ひゆる故、衣をかさぬるも、冬にもはらがさぬれば、かくいへるなり、西土にて、此事によく似かよへるは、冬の德寒と春秋繁露いひ、又其時を冬といひ、其氣を寒といふと管子みえたり、是ひゆといふ訓義と一致せり、白石曰、ヒユをフユといふがごとき、是もまたもと轉語にして、またフユといふことばにて、ヒユといふ語をこめたりと雅東いふも、普通の說なり、和語に冬をふゆと訓ぜしは、ひゆをいふ意なりと續節序記いふも同意なり、こゝをもてひゆるを冬といふ訓義は、古今みな一理なり、和訓栞もふゆは冬をいふ、冷の轉ぜるなりといへり、又冬之爲言中也、中者藏也と禮記みえたるは、難波津に咲や此花冬ごもりと古今和歌集序に引し歌の、詞意と同きにや、また冬木成（フユコナリ）春去來者（ハルサリクレバ）と萬葉集いふは、冬終也、物終成也と釋名いふ意と同じ、冬木成は終成也、冬極れるなり、故に春さり來ればとつゞけいふなり、又冬爲玄英と爾雅いふは、冬の別號なり、これ五行配當の色にとるなり、玄は黑也、郭璞が注に、氣黑而淸英といへり、拾芥抄にも、玄英の文字いでたり、爾雅を引しなり、夫よりして玄冬と元帝纂要いひ、玄陰、陰律、陰英、陰天、陰黃と壇囊抄いひ、玄冥、玄律と事物別名みえたり、是みな冬の空は、うすぐろく陰れるが故に、かゝる別名の出來る事にはなりにしなり、又方角にとりても、冬者北也、北は五色の色樣にとりては黑色なり、故に玄陰黃の三字をもて、冬の異名の中に、此文字を熟字とする事にはなりしなり、されども物名一樣ならず、爾雅には安寧といふ名目も見えたり、元帝纂要には、冬を玄冬といひ、風を寒風、勁風といひ、景を冬景、寒景といひ、時を寒辰といひ、節を麗節などと、わけて見えたれども、今の世には冬景、寒景、寒辰、麗節などといふは、たゞ冬の異名のやうに、いひならはせるなり、壇囊抄などにも、あまた異名みえたり、一々擧るにいとまあらざれば、こゝに略せり、又初冬、仲冬、季冬の三月にあてゝ、其主月の名となすもあり、或は三冬、九冬などゝ、其主月をさゝざるもあり、或は冬三月をすべくゝりし名目もあり、いはゆる冬三月此謂閉藏と素問みえたるは、冬の一時をいふ事、文面明白なり、